

アイデア

[小清水志織](#)

2020/12/20 22:23

家に帰りたくない。

秋も深まった十一月。黄色のバーが下りた踏切の手前で私は乱れたポニーテールを垂れて、ただサイレンの音に晒されていた。キンコンキンコン、キンコンキンコン。頭を中心に響く絶えることのないサイレンを聞いていると、足が地面からふわりと浮いて、そのまま踏切に侵入しそうな感覚に襲われる。一歩足を踏み出したとき、ゴオオー、ガタガタと銀色の二両編成車が弾丸のように目の前を通過して、線路に映る細い影法師を掻き消した。そのときになって、ようやく私は電車に轢かれたときの痛みや虚しさを想像することができて、ああ逝かなくてよかった、と一抹の安堵を覚えた。

それでも家に帰りたくないのは同じだ。アパートの前に立って「定礎」と書かれた石板の文字を見れば昭和三十五年と刻まれている。もはや還暦を迎えたアパートは、言わずもがな壁の亀裂や汚れが目立っていて、草むしりの手が入らない中庭には、錆だらけのすべり台が過去の遺物のように眠っている。こんな住まいのどこに魅力があるのだろうか。このアパートに戻るくらいなら、あの児童養護施設に帰りたくないと切に願う。施設は門限などの細かい規則があるにしても、温かい食事と個性豊かな友達、お母さん気質の先生

がいてくれる。高校の部活動から帰宅すると、ほんわかと漂う肉じゃがやシチューの匂いとともみんなが待っていた。あの空気がとても懐かしい。いっそアパートに入らずに、父の自転車を拝借して施設へ逃避しようかとさえ考えてしまった。

私は母親の記憶がとても薄い。聞いた話によれば私が生まれてからすぐ離婚して実家に帰ってしまったという。五歳のとき父方の地元に帰省した折、「リコンて何？ 何があったの？」と無邪気に聞く私に対して、父方の実家の親類は詳しく語ろうとせず、ただ笑うばかりであった。私はその笑顔を見るたびに、「ばあちゃん笑ってる。変な話じゃなかったんだ。怒られなくてよかった」という安堵を覚えた。そして同時に「このばあちゃんは一生信じられないな」という拒絶感を混ぜ込んだ気持ちになるのだった。そう思った瞬間に、喉の奥から急に生温い唾が湧いてきて、不味いと知っているそれを無理やりにでも呑み込むのだった。幼いながらも、触れてはいけない「大人の世界」と「子どもの世界」の境界線をまたいでしまった違和感にたじろぎ、罪の意識を覚え、手足の動きが止まるのだった。しかし、幼かったことが幸いして、そんな一抹の違和感はすぐ跡形もなく消え去り、好きな少女戦士の話に付き合ってくれるばあちゃんの膝で私は無邪気に笑うのだった。

それでも、私にとって「お家」とは、心の底から笑える空間ではなかった。父の手一つで育てられた私は、周りの子とは感覚がずれた少女に成長した。アイドルやお洒落の話についていけず、グループの話題に上ったスポーツ万能なクラスメイトの男の子も素敵だとは思えなかった。父はとあるメーカーの事務員だった。日曜日は大概が私と二人で過ごす時間が増えるのだが、

父は六畳の居間にこもりきりになって好きなアニメや映画に耽り、私と会話しようとするのが少なかった。父の背中というものは恐ろしいもので、私は唯一の肉親である父に近づこうと、揃ってテレビの世界の人間や動物、ときには魔物やロボットが大胆に暴れ回る物語の住人と化した。だから学校の宿題も叱られない程度に適当に済ませ、残りの時間は父が録画したアニメの消化に付き合うか、隣の寝室に置いた図書館の本に入り浸るかして過ごした。夏休みの晴れた午後、近所の子どもたちが群れになって鬼ごっこをしているのをよそに、彼らをまるで異物でも眺めるかのように、カーテンの閉じた部屋に籠っていた。

中学校に上がって、休日に部屋に籠る習慣は私の意思だと思っていたのが、実は父がそうさせていたのだと、少しずつ気づき始めた。父は意図的に家の外で行うような遊び―鬼ごっこやかくれんぼ―をしたがる私を否定し、玄関先でできる縄跳びやフラフープを異様なまでに薦めた。私がテレビを見たいとせがむと、父は決まっていたいつもの笑顔でとても嬉しかった。嬉しがつてくれたことに安堵を覚え、私は自然と外出を伴う遊びよりも家の中でできる遊びにシフトしていったのだ。それが娘に対する偏執的な「独占欲」であると感じ始めたきっかけは、他の中学の友人の休日の様子を知ってからだ。彼女たちは驚くべき頻度で街中のショッピングモールに出かけたり、映画を家族と見に行ったり、友人同士でお菓子を共有したりしていた。安井家の休日とはまさに月とスッポンのちがいだった。

何かがおかしい。慣れない中学校からの帰り道、新品のスカートの裾に膝が痒くなりながら私は考えた。私は一カ月前の三月、十二歳の誕生日プレ

ゼントを渡されたときの出来事を思い起こした。毎年、何かしらのプレゼントを用意してくれる父だったが、父は私の欲求に先回りして物を与え、それが私の欲求を満たそうが満たさまいがお構いなしに、「ありがとう」と呟く私を見て満足するのだった。私は「ものをくれる大人イコール良い大人」という単純な方程式しか知らない子どもだったから、特に嫌悪感や不信感を抱くことはなく、一途に目の前の男を信頼した。だが十二歳を過ぎた今、徐々に交友関係が広がりつつあった私は、一瞬だけその信頼に僅かな亀裂が生じた。四月の末、私が部活動に入りたいと申し出たとき、その亀裂は塞ぎがたいものとして広がった。

インターネットが社会の隅々に浸透してきていた時代にあって、私は父に向かって「パソコン部に入りたい」とせがんだ。それまで私が父に向かって願い事をすることはほとんどなかった。願い事は私からするものではなく、父が自然と叶えてくれるものだったから。ゆえに、自我の目覚め始めた私が頭を下げて無邪気にねだる姿を、父は不思議そうな眼つきで見ている。父は一言「だめだ」と言った。「なぜ」と問うと「お金がかかるから」という。「パソコンは学校のものだよ」と言う。「帰りが遅くなるから」という。しまいには「それ以上わがままを言えばご飯はなしだよ」と語気を荒げてきた。私は蛇に睨まれた蛙となってひたすらに謝り、パソコン部という夢は帰宅部という現実へと変わった。

夢を諦めた代償にいつもの秩序を得た私だったが、少女から女性へ、いや、一人の人間として目覚め始めた心は、次第に父の言動に懐疑心を募らせていった。午後六時半に帰宅する父を待たず夕食を済ませてこっぴどく叱

られたり、それまで禁じられた恋愛漫画を買って机の隅に隠し、それを取り上げられたりした。日を追うごとに、父から受ける小言は叱咤となり、罵倒となっていた。優しい父というアイデアはあまりにも脆かったと気づいたときはすでに遅かった。中学二年のころには、言葉の暴力は手足による暴力と化した。狡猾なことに、父は流血の一步手前で暴力をやめ、わざと周囲にばれにくいような小細工までしてのけた。だが、私がとうとうクラスメイトにぼろりと愚痴をこぼしたことがきっかけで事が大きくなり、父はどこかに連れていかれ、気づけば私は児童養護施設で生活するようになっていたのだった。

施設の生活で、嘘のような人の温かさを知った。憧れの高校に合格できたのも、職員の先生や高校のお兄さん、お姉さんが手取り足取り勉強の指南をしてくれたお陰だった。兄や姉のみならず、数え切れないほどの弟や妹もできて、私の錆びついた心は急に回転を始めて磨きがかかり、かつての輝きを取り戻し始めた。だからこそ、高校二年の秋、突然「お父さんの元に帰れるって」と先生から言われたときには、嬉しさを毛ほども感じなかった。

数年ぶりに父と再会したとき、父は当時と変わらない笑顔で私を出迎えた。案の条、謝罪の言葉はなかった。父の笑顔は、私が母との離婚を尋ねたときに親類が見せた微笑みとそっくりだった。本能的に身体が拒絶反応を起こした。一日目は何事もなく過ぎ去った。しかし二日目の朝、朝食をともに食べているとき、父は私の一挙手一投足を細かく観察し、小言を言い、私が反抗すると掌をたたいた。父は刑期を終えた現在も、まったく変わっていなかった。失望した私は、逃げるように寒い街路へ飛び出して学校へ駆けた。授業が終わるのが早く感じられて、部活動が終わる時間が怖くてしかたなく、

帰り道を歩く足が鉛のように重く、紅葉のしきつめられた舗道を独り歩くのだった。このような生活が一週間続いている。

ああ、今日はたたかれなかったぞ。

昨晩は比較的穏やかに父と夕食をともにし、翌朝、安堵のなかで金曜日を迎えた。単純な私はスキップしながら高校行きのバスに乗り、車内でいつものように友人と挨拶を交わした。学校に到着して朝礼が済んだあと、私は引き出しから分厚い教科書とノート、資料集を取り出した。一限目の授業が楽しみで仕方がない。金曜日は、この高校で一番好きな先生が担当してくれる、世界史 B の授業がある日なのだ。この先生との出会いは高校一年の世界史 A の授業だった。この高校はカリキュラムの都合上、一年次には世界史の近代史から勉強する。時代劇が好きだった私は、入学当初は日本史の授業に期待していたので、担任の先生から世界史の教科書を渡されたときは正直がっかりした。だが、そんな落胆をするなんてもったいなかったと思うほどに、この宇田先生の授業は面白かったのだ。

宇田先生が、いつものスマイルで教室にやってきた。キャスター付きの台車に教科書類やノートパソコン、プロジェクターを乗せて、片手に伸縮自在な指示棒を引っ提げ、「はい、おはようございます」と挨拶する。言葉一つひとつを確かめるように話す彼の言葉遣いは、いつも肩に力が入りがちな私を和らげてくれた。プロジェクターの電源を入れ、天井に設置されたスクリーンを指示棒でぐいっと下ろす。生徒に「ちょっとごめんね」と座席を移動しても

らって、プロジェクターからの映像がぴったりとスクリーンの枠に収まる位置を見定めた後、今度はチョークをつまんで慣れた手つきで黒板に板書を始める。一連の作業は洗練されていて無駄を感じない。板書の「本日のテーマ」やベン図、キーワードを眺めているだけで、今日の授業の内容は何だろうとわくわくしてくる。先生の授業の五十分間、私は家庭でのすさんだ現実を忘れることができた。

クラス会長の号令で挨拶をしたあと、宇田先生が口火を切った。授業のテーマはヨーロッパのルネサンス。スクリーンに「ヒューマニズム」の重要語句が赤字で浮かびあがったあと、「ルネサンスはイタリアから始まったとされていてね」と解説が始まる。先生の授業は「お勉強」というより「トーク」と表現するに相応しい。パワーポイントのスライドショーによって次々映し出されたキーワードが、先生の語りによって一本の大河のごとく繋がりがあい、私の全身を勢いよく流れていく。授業の核心テーマの解説をしながらも、折を見て、黒板のベン図に別の視点でまとめた情報が書き加えられ、ルネサンスという一つのテーマが重層的な知識の累積となって物語を紡ぎ出す。話のついでに飛び出る豆知識や余談は、受験には関係がない情報かもしれないけれど、私にとっての楽しみの一つとなっていた。私は見開きにしたノートの左側にスクリーンの文字、右側に先生の板書や余談をせっせと書き込んでいく。一人の人間の頭にどれだけ詰まっているのかと思うほど、怒濤のように溢れ出る知識の波に溺れながら、私は束の間の至福を覚えるのだ。五十分の授業が果てた後、私はパッとシャーペンを机に放り投げた。書きすぎて火花を吹いて煙が上がっているように見えるシャーペンも、黒鉛で汚れた私の手のひらも、いい意味で疲労している。片付けている先生の背中を一瞥する

と、まったく息が上がっているように感じない。どれだけ体力があるんだよ...
と思いながら、私は先生に近づいた。「授業後の片付け二分間」は、先生に話しかけるまたとない好機である。

「先生、おはようございます。あの、ミケランジェロのところで...」

教師に質問するなんて優等生だと思うかもしれないけれど、成績はクラスで底辺から数えた方が早い劣等生なのだ。ただ世界史に対する興味が人一倍強くて、この科目だけ飛び抜けてテストの点数がよい(逆に他の教科が足を引っ張るので平均はプラスマイナスゼロを乗り越えてマイナスとなる)。そして私の場合、質問の目的は授業の理解というよりも、宇田先生と会話することに重心が傾いている。

「ああ、それはね」

宇田先生に一つ質問すると、少なくとも五倍の分量となって返ってくる。ノートにメモする余裕はないので、キャパシティの狭い脳みそにできるだけの情報を書き留め、私は心の底からにっこりと笑った。先生には次の授業があるので、もっと話したい欲求を抑えながら手を振る。本当は、父のことを話したかったのだ。でも仕方がない。諦めて二限目の準備をしようとしていると、先生は不思議な言葉をかけた。

「一教員に手を振ってくれるなんて、嬉しい限りです。教員は生徒の味方ですから、もし何かあったら、いつでも話してくださいね。では」

どきん、と胸が波打った。あまりのタイミングのよさに、先生の背中を二度見した。先生は足早にキャスター付きの台車をコロコロと転がして隣の教室に移っていく。どうしたらいいんだろう...と悩みながら、私は二限目の授業を受けた。

一日が長く感じられた。学校の都合でいつもより早く放課になってくれたのが幸いだっただけで、しかも金曜日は、父は会社で週末の整理を行うために帰りが遅くなるのだ。帰宅時間がずれたときには、夕食は各自で残り物を温めて食べる決まりになっていた。だから私には時間という制約がなかった。このチャンスを逃してはいけないかもと本能が告げて、怪しまれないようにできるだけ平静を装って職員室へ向かった。

「失礼します」甲高い声音が雑多な職員室に反響して怖くなった。何人かの先生がこちらを見ている。膝が震えてきた私は、口実にもってきた世界史のノートと背表紙を握って、踵を返した。駄目だ、血を分けたわけでもない大人に、身の上話を相談していいはずがない。もう高校生なんだから、家のことは自分で解決しないとイケないんだ。そう言い聞かせて、エナメルバッグにノートをしまいこんだとき、聞き慣れたあの声があった。

「これは安井さん。また質問に来てくれたんですか」

私は制服のリボンが浮き上がるくらい飛び上がってしまった。宇田先生は指示棒を肩たたきのように携えて、職員室に入ろうとしていた。思わず「いえいえ、あの、いつもの台車は？」と奇天烈な質問をして恥ずかしくなった。先生は笑った。

「ああ、さっき教室から運ぶとき、キャスターが外れてしまってね。しばらく台車は使えません。トホホですが、きっとこれにも何か意味があるのでしょう」

「どういうことですか？」私は興味を惹かれてなお聞き返した。

「ああ、分かりにくかったですかね。私が人間として生きるうえで、大切にしている言葉の一つです。生きているなかで、何か好ましくない出来事が起こったとき、私は『きっと意味がある』と己に言い聞かせるのです。たとえどんなに辛いことであろうとも、自分や周囲が変わるチャンスとして受け止め、しっかりと向き合いたいのです。障壁や災難も生きるための糧にしたいのです。この意味が、分かりますか」

私は眩暈のような感覚になりながら、大きく頷いた。

「完全には、理解できないのですけれど…。でも、言いたいことは分かる気がします。分かるように努力したいです」

「いい回答を聞けました。百点満点です」

先生の穏やかな表情を見て、私の中の脆い風船が破裂した。とめどない涙が溢れてきた。他の先生も気になっているようだったが、一番驚いているのは言うまでもなく宇田先生だったろう。先生は私の手を取って、さりげなく職員室の脇にある相談コーナーに連れて行った。それから一時間以上、愚痴と嗚咽が混じりあった私の話を、先生は受け止めてくれた。

話がひと段落したとき、先生は腕を組んで答えた。

「話してくれてありがとう。自分の辛さを話すのって勇気が要りますよね。それだけでも、貴女は立派です。今までよく耐えてきましたね。その事実にも、まず貴女を尊敬します」

腕を解いてから、私の細い肩をポンと叩いた。

「お父さんのふるまいに義憤の念を感じました。一度罰を与えられているのにもかかわらず、いい年をした大人がまったく反省していない。これは由々しき事態です。少し時間をください。他の教員と話し合ってもいいですか。週明けには、お答えできるようにします」

「嬉しいです…。でも、週末を無事に過ごせるかどうか」

「大丈夫です。今、貴女は私に話してくれました。この時点で、貴女は独りではありません。I am on your side です。万が一に備えて、私の携帯電話番号を覚えておきます。危なくなったら、すぐにかけてください」

プリントの裏紙に番号をメモしてこちらの手に乗せた。どんな高価なお守りよりもご利益がありそうだと思えた。堅くそれを握りしめて私は強く頷くと、お腹に力を入れて家路に着いた。

週末はできるだけ父を刺激しないよう、息をひそめて読書に没頭した。早く月曜日が来てほしかった。月曜の朝、午前三時の目覚まし時計を見て、緊張の糸が切れた私は寝過ごしてしまい、危うく遅刻するところだった。

月曜日の昼休み、緊張した面持ちで職員室を訪れた私だったが、宇田先生の姿はなかった。別の先生に尋ねると、午前の授業を切り上げて急用で早退したらしい。表現しがたい不安が襲ってきて、私は先生の電話番号が書かれたメモを取り出した。だが、かけるまでの勇氣はなく、頭に雲がまとわりついたようになりながら、いつものアパートに帰った。

そして、結末は意外な形で迎えられた。

玄関先に、知らない制服の男性が立っていた。私の姿を認めると、待っていたとばかりに近づいて丁重に挨拶をした。差し出された名刺には「児童相談所 職員 田中邦夫」と書いてあった。

「安井千佳さんですね。かなりショッキングな話なのですが、聞いてくれますか」

覚悟ができていた私は黙って頷いた。

「貴女のお父様が、行方をくらませてしまいました」

田中さんの話を、まるで夢の中にいるかのような心地で私は聞いていた。児童相談所は一件の通報を受けた後、会社に出勤した父に電話をかけて確認を取ったという。相談所の予定では、すぐ処罰などの重い対応を考えておらず、退勤時に面談をするつもりだった。虐待を取り締まるだけでなく、虐待してしまう親のサポートも重要な役目であるからだ。しかし職員が約束の時間に自宅を訪れたとき、父の姿はなかった。職員が会社に連絡すると、信じがたいことに父は職場に早退を申し出てすでに不在という。念のため、私が玄関を開けて入ったが、父の姿は煙のように消えていた。

応急措置として、再び私は施設で夜を過ごした。温かい空間が私を待っていてくれて、久しぶりに美味しく夕食を食べられた。施設の先生や友人も、深くこちらの内情を穿鑿せず、「会いたかったよ！」と出迎えてくれたのが嬉しかった。いい夢が見られそうだと思って、私は深い眠りに就いた。

翌日、宇田先生と会った。先生は私を見るなり、目の前で土下座した。

「安井さん、申し訳ないです。お父様の件を聞き、驚きました。昨日の午後、児童相談所に出かけていたのです。まさか逃げる道を選ぶなんて...。もっと建設的な解決がしたかったのに」

私は狼狽した。「やめてください、先生！ 先生のせいじゃないです。コソ泥みたく逃げた奴が悪いんです。私は施設にいて、大丈夫ですから」

先生は悲しそうに首を振った。

「だが、貴女は父という存在を失くしてしまったのでは...私をもっと、うまくやれていれば...」

私は先生の膝もとにしゃがんだ。リノリウム張りの廊下はやはり冷たい。

「そんなこと言わないでください！ 先生はご家族のこともあるし、他の生徒さんのこともあるのに、私のために百二十パーセント尽くしてくれました！ 感謝してもきれません。父のことは、こちらで何とかします。ですから、いつもの面白い授業を聞かせてください。お願いします」

そして、どうしても伝えたいことを言った。

「確かに、私にとって血を分けた父は遠い存在ですけど、私は大丈夫なんです。なぜって、実の父以上に信頼できる大人に出会えたんですから。ほ

ら、プラトンのイデア論ですよ。私の真理世界のなかの父は、実の父でなかったということ、それだけです。その意味で、私は独りではありません。本当に、ありがとうございます」

先生はいつものスマイルを浮かべ、お礼を返して別れた。

父は一週間後に観念したかのように児童相談所に現れた。私は一度だけ面会したが、もはや語るべき言葉をもたなかった。面倒な事務手続きが淡々と続き、色々なやりとりを経て、私は正式に施設に再入所となった。施設の門を去っていく男の背中を、半ば哀れなものであるかのように冷淡に見つめていた。人生なるようにしかならないんだな、という一片の真理を感じながら、私は友人の元へ帰った。

宇田先生は、高校二年の冬に別の高校へ異動が決まった。異動を知ったときはとてもショックだったが、離任式の時先生とメールアドレスを交換することができて嬉しかった。アドレスの書かれた裏紙を、あのときと同じように強く握りしめた。

試しに挨拶メールを送ったとき、いつもと同じ優しい口調の文面が届いた。

「こんにちは、千佳さん。お元気ですか？ 私は新天地で元気にやっています。これから大学受験という試練が待っていますが、応援しています。どう

か、貴女は貴女の生き方を見つけてください。貴女の眼は、それができる者の眼をしています。私が保証します」

嘘でしょう、とおかしくなりながら、文面を読み進める。

「カエサルに例えるなら、貴女はお父上の件で、一度ルビコン川を渡ったのです。川を渡り切って、勝利したのです。貴女はそれを自覚していないかもしれませんが、これは自信をもっていいことです。もし、再びルビコン川を渡らなければならなくなったとき、いつでも連絡くださいね。待っています」

スマートフォンの画面から目を話して、春が近づく空を仰いだ。雲一つない快晴とまではいかない、灰色の雲と白い雲が点在しているような斑模様の空がそこにあった。でも、雲の隙間からは白く真っすぐな光が差し込んでいて、その奥で佇んでいる巨大な恒星の存在を私は確かに感じた。人生ってこんな感じなんかなと、十八歳の私はわざとませた思考をしてみて、そんな自分がおかしくなった。

そして一年の月日が流れた。合格発表の日を迎えた私は、迷わず宇田先生にメールした。

「先生、今日、合格発表に行ってきました。結果は...来た、見た、勝った！
ですよ！」

どうか、宇田先生がこれからもお元気でありますように。そして、私が先生から受けたご恩を返せますように。あのときの嬉しさを、誰かのために分けてあげられますように。

これから私は新しい世界に旅立つ。その切符を手にした今、私はあの背中に向かってこう言うのだ。

「先生、本当にありがとう」と。